

古典の事典

精読を読む——日本版

2

五ノリ一〇八六〇
五ノリ一〇八六〇

2

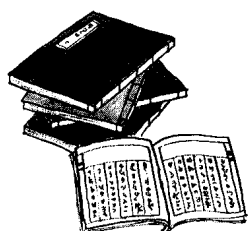
九五六一〇八六（平安）

古典の事典

精髓を読む

日本版

河出書房新社版



古典の事典へ精髓を読む——日本版——

② 九五六一〇八六（平安）

昭和六十一年六月十七日 第一刷発行

編纂 古典の事典編纂委員会

発行者 清水 勝

発行所

株式会社 河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二丁目三番二号
電話〇三―四〇四―一二〇一

印刷

大日本印刷株式会社
株式会社 サンコー

製本 大日本製本株式会社

©1986 無断転載複製を厳禁する

ISBN4-309-90202-2 C0591

②九五六一〇八六（平安時代）

もくじ

まへがき 日本的感性の原点——王朝の美学——

.....

伊勢物語

昔男のみやびの愛の歌物語

.....

大和物語

和歌隆盛期の宮廷人たちの歌語り集

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

平中物語

運命に流されゆく恋を描く歌物語

.....

宇津保物語

音楽中心の芸術至上主義の長編物語

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11

落窪物語

ままこいじめを描いた物語

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12

源氏物語

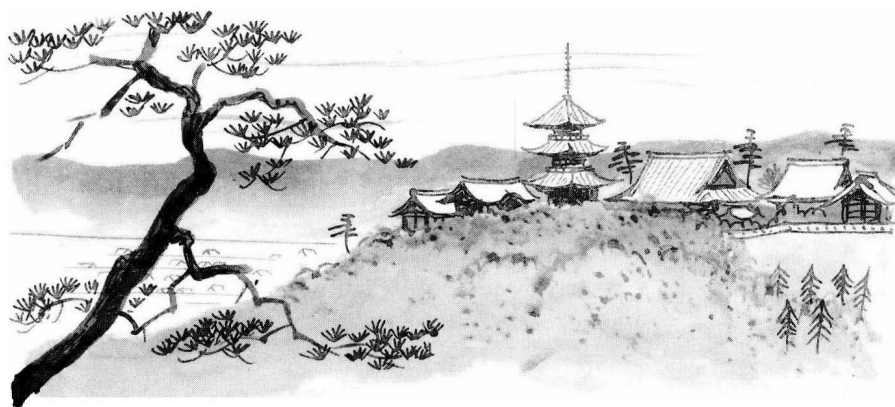
古典文学の最高峰としての恋愛小説

.....

夜の寢覚

宿世に翻弄される女性の生涯を描く

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12



浜松中納言物語

日本と唐土を結ぶ愛の行方

九九

堤中納言物語

十編の作品からなる珠玉の短編物語集

一〇九

狭衣物語

貴公子狭衣中將の悲恋を優麗に描く

一二一

拾遺和歌集

三代集の到達点を示す王朝和歌集

一三五

後拾遺和歌集

女流歌人の活躍と歌風の新機軸

一四五

和漢朗詠集

漢詩文と和歌を総合した詞華集

一五五

蜻蛉日記

女流歌人が告白した愛の不信の手記

一六七

和泉式部日記

情熱の歌人が綴った自らの恋物語

一八一

紫式部日記

宮廷の栄華と悲哀を記す宮仕え日記

一九三



更級日記

夢と現実のあいだに揺れる女性の記

一一五

成尋阿闍梨母集

子を思いあまり闇にくれ惑う母の記

一一七

本朝文粹

平安時代の優雅華麗な文章の精粹

一二九

本朝無題詩

平安後期の詩人三十人による漢詩集

二四一

枕草子

鋭い機知と新鮮な感覚美溢れる名文

二五三

日本往生極樂記

極樂往生を願った人々の伝記集

二六九

御堂関白記

藤原氏の全盛期を伝える道長の日記

二八一

小右記

道長に対立した右大臣の公卿日記

二九三

将門記

坂東平氏一門の躍動する合戦記

三〇三



陸奥話記

前九年の役の合戦記録

三一五

往生要集

浄土思想史上における金字塔

三二五

類聚三代格

律令時代の法の変遷を伺う貴重な書

三三七

政事要略

平安時代の法律制度を知る根本史料

三四七

作庭記

我が国初の造園技術の秘伝書

三五七

九条年中行事

平安貴族の儀式作法を記す書物

三六九

医心方

日本人の手による現存最古の医書

三七七

遊女記

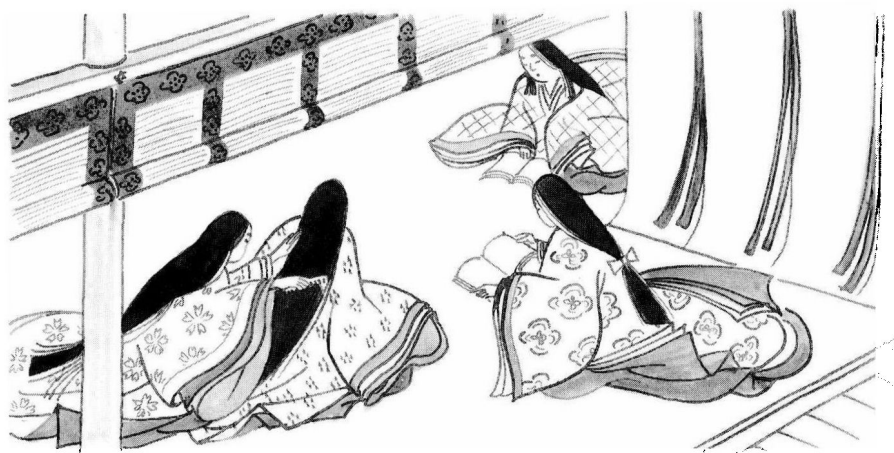
王朝時代の遊女の珍しい記録

三八九

新猿楽記

王朝時代庶民生活の風俗図絵

三九七



この事典を利用される前に

○第二巻について

(一)この巻では、九五六(天曆十)年から一〇八六(応徳三)年の間に成立・刊行された古典を三十四作品収録しました。成立・刊行年の未詳のものについては、作者の生没年を拠りどころとしました。

(二)この巻に収録した古典は、それぞれ文学、歴史、宗教・哲学、社会、生活、科学、地理・民俗のジャンルに大別して、時代順に配列してあります。

○中扉について

(一)収録古典にはすべて中扉をもうけて、分野、書名、著者・編者名、「この古典の五つの魅力」を表示し、原本写真を掲載しました。

(二)書名、著者・編者名などに二つ以上の書き表し方、よび名がある場合には、学界・教育界で定説となっているもの、一般に広く用いられているもので表記することにしました。

(三)中扉の「この古典の五つの魅力」では、作品の要点、分野、歴史的価値、後世への影響、現代との関わりなど五つの観点から、その古典の特色を簡潔にまとめました。

(四)また中扉には、現存する貴重な原本(版本・写本・古活字本など)から本文の一部を写真版で掲載しました。とくにこの巻でとりあげた「読みどころ」と関連の深い箇所は、参照頁を表示することにしました。

○解説について

(一)作品の解説は原則として「あらまし」「原典の構成」「成立の時代」「影響と価値」「原典と参考書」「作品の舞台」「しおり」の七項目をもうけ、どこからでも容易に検索、読めるようにしました。ただし、作品によっては、必ずしも適合しない項目もあり、その場合には他の詳記すべき項目に重点をおき、その項目は省略することにしました。

○読みどころについて

(一)読みどころでは作品の重要な場面、また一般に多く引用される箇所を抄出して、上段に原文を、下段に現代文を併載しました。

(二)主要な作品については、鑑賞の手引きとなるように、現代文の冒頭に抄出箇所の概要を添えることにしました。

(三)原文の仮名づかいは原則として、歴史的仮名づかにしましたが、読みやすさを考慮して、ふりがなは現代仮名づかいとしました。ふりがなは外国の地名や特殊な用語を除き、すべて平がなで付すことにしました。

(四)原文も新たにふりがな・送りがな・濁点・句読点・並列点(中黒)・段落を施し、さらに会話文・引用文には「」や「」を、書名には『』を加え読みやすくしました。また原文中の割注・頭注は()でくくり、他の引用文と区別しました。

(五)原文中のく、ゝなどのくり返し符号は使用せず同字を重ね、漢文体も読み下し文(平がなまじり文)にして、原文の読解鑑賞に役立つように配慮しました。

(六)現代文は、わかりやすい内容にするために、難解な語句は説明を補記し、また旧地名は現地名を、和暦年数は西暦年数を表示することにしました。

○監修者

石井良助（東京大学名誉教授・法学博士）

伊藤鄭爾（元工学院大学学長・工学博士）

井上靖（小説家・芸術院会員）

数江教一（中央大学名誉教授・文学博士）

角田文衛（平安博物館館長・文学博士）

暉峻康隆（早稲田大学名誉教授・文学博士）

奈良本辰也（歴史家）

古川哲史（東京大学名誉教授・文学博士）

松浪信三郎（早稲田大学名誉教授）

山本健吉（文芸評論家・芸術院会員）

○編纂者

朝倉治彦（国立国会図書館司書）

遠藤武（文化女子大学教授・文学博士）

大曾根章介（中央大学教授・文学博士）

北小路健（歴史家）

紀田順一郎（評論家）

久保田淳（東京大学教授・文学博士）

祖父江孝男（放送大学教授）

田辺聖子（小説家）

谷沢永一（関西大学教授・文学博士）

馬場あき子（歌人）

春田宣（国学院大学教授・文学博士）

松田修（法政大学教授）

松本寧至（二松学舎大学教授・文学博士）

黛弘道（学習院大学教授・文学博士）

宮田登（筑波大学教授・文学博士）

吉田豊（歴史家）

まえがき 2

日本的感性の原点——王朝の美学

† 梅から桜へ、日本の美意識の目ざめ

平安時代の中、後期とよばれる十世紀半ばから十一世紀末にかけて、政治史の上では古代律令制の変質、崩壊が進み、藤原氏による摂関政治が確立しました。

そして文化の面では、大陸からもたらされた先進文明と、日本古来の民族文化との融合によって、後世に広く深い影響を及ぼす「もののあはれ」を主調とする王朝文化が成立したのがこの時期です。

これに先立つ嵯峨天皇の弘仁三年（八一二）、京都の神泉苑でわが国の最初の宮廷主催の観桜会が催されました。

また、それから二十年ほど後の仁明天皇の御代（八三三―八五〇）には、それまで内裏の紫宸殿の庭に植えられていた梅が桜に植えかえられました。今も三月の雛飾りにみられる「左近の桜」のはじまりです。

このように桜の花をめぐる風習が、まず上流階級の中に根づいていったことは、日本文化史の上でひとつの象徴的なできごとでした。

もちろん桜は、太古から日本の山野を美しくいろいろとっていたのですが、素朴な農耕と採集の生活に明け暮れる時代には、それは人々の観賞の対象とはなりませんでした。

古代の農民は、桜の開花を春の農作業を開始せよとお告げと考え、せっかく開いた花が烈しい風に吹き散らされると、農作物もそのように風の害にあうのではないかとおびえました。

今も京都紫野の今宮神社（京都市北区）で行われる花鎮めの祭りは、咲いた桜の花が散らぬように、農作物が風に荒らされぬようにと祈る祭事です。

花の美しさを、信仰や生産から離れて純粹に觀賞する風習は大陸からもたらされました。

まず、その対象となつたのは中国原産の梅の花です。

応神天皇の御代に百濟（朝鮮）から渡来し、はじめて『論語』『千字文』を奉つたという王仁が、仁徳天皇の即位を梅の開花にたとえて

なにはづにさくやこのはなふゆごもり いまをはるべとさくやこのはな

と祝福したという伝説は、梅が大陸文明を象徴する花であつたことを、よく示しています。

もともとウメという呼び名は、中国語のメイ、または朝鮮語のマイのなまりで、本来のヤマトコトバではない外来語です。

そのハイカラな舶来の花が上流階級にもてはやされて、觀梅の宴がしきりと催されたのが、奈良朝から平安初期までのことでした。

『万葉集』に詠まれている花で最も多いのが梅で九十七首にもものぼり、当時は、ただ花といえば梅の花を指したほごです。

それが『古今和歌集』においては桜が圧倒的に首位を占め、以後、今日に至るまで、桜が日本の花の代表とされています。

古代の日本人は、まず大陸からもたらされた梅の花と、それを觀賞する風習によつて花をめぐる楽しみに目を開かれました。そしてあらためて日本の風土に根づいた桜の美しさを見直し、らんまんたる花の雲のもとでのお花見に興ずるようになったのです。

梅から桜へ、この転換と共通する現象は、当時の日本文化のさまざまな分野で起こり、それらが相まって、中国風一辺倒から日本独自の思考や美意識が成長、定着していきました。

‡ 中国文化へのしなやかな対応ぶり

桓武天皇は唐（中国）の長安を手本として平安京を造営しましたが、それは当時のわが国の国力をはるかに越えた壮大華麗な規模のものでした。このことだけをみても、当時の指導者階級が、偉大な中国文明に対して、どれほど強いあこがれと畏敬の念を抱いていたかがわかります。

建築や仏像彫刻などの堂々たる造形、けんらんたる漢詩・漢文、深遠精緻な儒教や老莊の哲学、魂の救済を説く仏典（お経）の数々などを通じて、当時の知識人はそれまで知らなかったものの見方、考え方を学んだのです。

しかし当時の人々は、この新しい外来文化を精いっぱい吸収しながらも、古来伝えられてきた日本独自の簡素もののやわらかな感性を失いはしませんでした。

広大な国土と悠久の歴史に育まれた中国文化の重厚な量感は、こまやかな四季の移り変わりと湿潤な風土の中に育ってきた私たちの祖先にとって、ときとして息苦しい圧迫感を与えたのではないのでしょうか。

これに対して当時の人々は、まことに柔軟に、しなやかに対応しました。

異なる文明に真っ向から対決するのではなく、その長所を巧みにとり入れながら、それを日本人の体質に合うように崩し、和らげていったのです。

京都駅にほど近い東寺（京都市南区にある教王護国寺）は、唐に留学して真言密教の精髓を体得してきた弘法大師空海が帝都鎮護の霊場として創建した寺です。

その中心をなす宏壮な講堂の内陣には、豪毅な風貌の不動明王をめぐって、異国的な雰囲気をつたえた諸仏、諸尊がまつられ、その迫力は今なお見る者をたじろがせます。それはまさに、日本に移植された唐代文化の粋といえましょう。

ところが、境内の一面にある御影堂の前に立つと、私はいつもほっとした安らぎをおぼえます。空海の日常の生活の場であったと伝えられるこの建築は、南北朝時代の十四世紀末に再建されたものですが、かつてのお



東寺御影堂。もとは官立の大寺院であったが、弘仁14年空海50歳の時、嵯峨天皇により与えられた。京都における真言宗の道場として、多くの支持をうけた。今の御影堂は北朝、後醍醐天皇の康暦2年再建のもの。

もかげをよく伝えているといわれています。

檜皮葺きの屋根のゆるやかな勾配、白壁と素木とが親しみぶかく映り合う外観をみると、唐文化の摂取にあればどの貪欲さを示した空海でさえも、やはり日本人の感性を十二分に備えていた人なのだとすることを、素直に認めざるをえません。

亀井勝一郎（昭和四十一年＝一九六六没）は、その未完の名著『日本人の精神史』のなかで、圧倒的な中国文明の成果を受け入れながらも、それを日本化していった営みを「草化現象」と名づけました。

草とは、楷書・行書・草書の草です。一字一画をかつきりと明確に書き分けねば気がすまない中国文化の論理性・倫理性を尊敬しながらも、それだけでは心が満たされず、あるかなきかのほのぼのとした情緒に遊びたいとする日本人の心情が、この草化現象をもたらしたのです。

それは、梅にかわって桜をめ、東寺の一面に檜皮葺きの御影堂を建てずにはいられなかった日本の感性の産物でした。

絵画・建築・彫刻・工芸・服飾・文芸等、当時の生活文化のあらゆる分野に現れた草化現象のうちでも、とりわけ後世に大きな影響を及ぼしたのが、日本独自の文字である仮名文字の発明と、それを駆使した仮名文芸の成立です。

↓ 紀貫之による仮名文字の効用の発見

漢字がもたらされるまで、文字というものを持たなかった日本民族は、当初、すべての記録を漢字、漢文によって行わねばなりません。漢字・漢文を巧みに使いこなして、中国的価値観にのっとった名詩・名文を綴ることは、当時の貴族官僚たちにとって必須の資格でした。

しかし、文字や言葉は特定の民族文化の産物ですから、王朝の才人たちがどれほど努力しようとも日本人の思考と感性を、外来の文字・文章体系である漢字・漢文によって表現しつくすことは不可能でした。

そこで、漢字の略字化から生まれた日本特有の文字である平仮名に注目が集まり、この美しい文字を自由に駆使した仮名文芸が誕生するのです。

もともと仮名文字は漢文を読みくだしたり、書き写すときの便宜のために考案された補助文字です。当時の人々は漢字を真名^{まな}、つまり本当の文字とよび、これに対する仮名、つまり仮の文字ははるかに格の低いものとして位置づけていました。

男尊女卑の当時にあつては、真名は教養高い男性の文字であり、仮名は中国的な教養とは縁の遠い女性専用の文字とされていたのです。

ところが、この一段低いものとされていた仮名文字・仮名の文章によってしか表現できない世界があることに、いち早く気づいたのは、『古今和歌集』の中心的編者である紀貫之でした。

貫之は漢文の深い教養を身につけていましたが、中国文化の洗礼を全身に受けつつも、日本民族の感性を豊かに開花させた稀有^{けう}の詩人です。

彼は、その『古今和歌集』の「仮名序」によって、自然と対決するのではなく、親和・融合して自然と一体となることが和歌の道であることを明らかにしましたが、この微妙な境地を表現するためには、当時、低いものとされていた仮名文を用いる勇気を備えていました。

貫之の仮名文学への傾斜は、その晩年の作品である『土佐日記』^{とさ にっき}に最もよく示されています。

都からはるか離れた土佐^{とさ}（高知県）に国守として赴任し、すでに七十歳を越えた貫之は、任地での愛娘^{まんながめ}の死や、かつて都で親交を結んでいた文人たちとの死別という悲しみをかみしめながら、帰任する都への五十五日間の船旅に旅立ちます。

『土佐日記』はこの間の見聞や感懷を淡々と記した日記ですが、それは、当時の男性文人たちが用いた漢文体ではなく、平仮名の文字で記されていました。

この時代としては例外的なこの表現形式をとるにあたつて、貫之はみずからを女性に擬装し「をとこもする日記といふものを、女もしてみむとてするなり」と書き出すのです。

これは、もはや世間的な名声や地位などには執着しない晩年のひとつのしやれであつたかもしれませんが、その心のうちに去来するさまざまな思いをすなおに吐露するためには、こけおどしの虚飾に陥りやすい漢文を用いることは、どうしてもできなかったためとみるべきでしょう。

貫之によつて切り拓かれた「仮名文字文芸」の道は、摂関政治による宮廷後宮の成立とともに、そこに集う多くの才女たちによつて受けつがれ、日本文化史上、空前絶後の女流文芸の全盛時代を迎えるのです。

† 女流文芸の先駆としての『蜻蛉日記』の位置

おそらくみずからは意識していなかつたものと思われませんが、平仮名文の効用を最大限に生かして、それに続く女流文芸時代の先駆者となつた女性がいます。

それは、のちに摂政関白にまで立身した藤原一門の大立てものである藤原兼家の第二夫人です。当時は女性の本名はなかなか明らかにされず、彼女の場合も、その子の道綱の名をとつて「道綱の母」と呼ばれています。彼女が兼家との結婚後、十五年ほどを経てよそ目にはなに不自由ない栄華のうちにありながら、底知れぬ空虚と不安にさいなまれつづけた日々を振り返つて率直に記した『蜻蛉日記』は、まさに仮名文字によつてしか表現することのできない内容のものです。

道綱の母は、同じく藤原の姓を名乗つてはいても、兼家よりはるかに身分が低く、かつてはその下役だつた父倫寧の娘として生まれました。その美貌はのちのちまで王朝三美人の一人として讃えられるほどだったといえます。

兼家は以前の下役の娘であるこの美女に対して、はじめから第二夫人として無遠慮に求婚し、父も当人も、これを拒むことはできませんでした。